天国入門の資格

マタイ伝第25章１～40節

夏期福音特別集会（４） 1987年８月23日

**【目次】**

【マタイ25】

１このとき天国はをりて、を迎えに出づる十人のにうべし。２その中の五人は愚かにして五人はし。３愚かなる者は燈火をとりて油を携えず、４慧きものは油を器に入れて燈火とともに携えたり。５新郎、遅かりしかば、皆まどろみてぬ。６に「やよ、なるぞ、出で迎えよ」とわる声す。７ここにみな起きてそのを整えたるに、８愚かなる者はきものに言う「なんじらの油を分け与えよ、我らの燈火消ゆるなり」９慧きもの答えて言う「恐らくは我らと汝らとに足るまじ、ろ売るものに往きてがために買え」10彼ら買わんとて往きたるに新郎きたりたれば、備えおりし者どもは彼とともににいり、而して門は閉ざされたり。11その後かの他の処女ども来りて「主よ、主よ、われらの為にひらき給え」と言いしに、12答えて「まことに汝らに告ぐ、我は汝らを知らず」と言えり。13されば目を覚ましおれ、汝らはその日その時を知らざるなり。……

27さらば我がを銀行にあずけ置くべかりしなり、我きたりて利子とともに我が物をうけ取りしものを。28然れば彼のタラントをてる人に与えよ。29すべててる人は、与えられていよいよ豊かならん。されど有たぬ者は、その有てる物をも取らるべし。……

31人の子その栄光をもて、もろもろの御使をいたる時、その栄光の位に坐せん。

32かくて、その前にもろもろの国人あつめられん、これをつことが羊と山羊とを別つ如くして、33羊をその右に、山羊をその左におかん。34ここに王その右におる者どもに言わん「わが父に祝せられたる者よ、りて世のより汝らのために備えられたる国をげ。35汝ら我が飢えしときにわせ、渇きしときに飲ませ、旅人なりし時に宿らせ、36裸なりしときにせ、みしときにい、獄に在りしときに来ればなり」37ここに正しき者ら答えて言わん「主よ、なんじの飢えしを見て食わせ、渇きしを見て飲ませし。38なんじの旅人なりしを見て宿らせ、裸なりしを見てせし。39何時なんじの病み、またに在りしを見て、汝にいたりし」40王こたえて言わん「まことに汝らに告ぐ、わが兄弟なるこれらのいと小さき者の一人になしたるは、即ち我に為したるなり」

# ●聖霊の溶けた実存

今回はマタイ伝25章の有名なです。譬話というものは、「これは何を意味するか」といったようなことを一々当てる必要はない。ただ、その譬話のこころをどのようにとるか。その時に示されたままでよろしい。「油」とは何か、「燈火」とは何か、と限定する必要はない。キリストは何もそれを説明していない。

「見る目ある者は見るべし、聞く耳ある者は聞くべし」

と言う。聖霊は「火」に例えられ、また「水」に例えられ、また「油」にも例えられます。聖霊のバプテスマという。バプテスマは旧約聖書ではオリーブの油を使う。

この「燈火」は、私たちはここで今日は「聖霊」と思って読みましょう。では、「油」は何と思いましょうか。私は、これは「実存」だと思う。「聖霊、聖霊」と霊のことばかり言って、日常生活が本当の「油（実存）」になっていなければ、聖霊の溶けた実存になっていなければダメだ、ということであろうと思います。

「愚かな者は油を携えていなかった」

ということは、日常の生活がキリストに即していなかった。そのようなことを別な角度から切々と語っているのがヤコブ書です。

５新郎、遅かりしかば、皆まどろみてぬ

新郎が遅くやって来た。皆まどろんで眠っている。よく、キリストは

「目をましておれ」

とおっしゃいます。詩篇の121篇も、

「エホバは……汝をまもるものはたもうことなし。視よイスラエルを守りたもうものはこともなく寝ることもなからん。」（詩篇１２１・３～４）

我々を守る神さまは常に目を醒まして皆を守っているという。

皆は待ちくたびれて、まどろんでいた。

６に「やよ、なるぞ、出で迎えよ」とわる声す。７ここにみな起きてそのを整えたるに、８愚かなる者はきものに言う「なんじらの油を分け与えよ、我らの燈火消ゆるなり」

「油を分けてくれ」と。実存は分けるわけにいかない。「買って来なさい」と。買うわけにもいかない。買いに行ったところが間に合わなかった、と譬話でそういう話になっていますが。

10彼ら買わんとて往きたるに新郎きたりたれば、備えおりし者どもは彼とともににいり、而して門は閉ざされたり。11その後かの他の処女ども来りて「主よ、主よ、われらの為にひらき給え」と言いしに、12答えて「まことに汝らに告ぐ、我は汝らを知らず」と言えり。

最後に

「汝らを知らず」

では、これはもう、どうにもならん。

# ●本当に生きていろ

13されば目を覚ましおれ、汝らはその日その時を知らざるなり。

「目を覚ましている」

ということはただ目を覚まして待っていることではない。

「本当に生きていろ」

ということです。いつ最後の日が来ても、「アーメン、ハレルヤ」と言って、一日を一生として全存在をもって、躓いても転んでも滑っても倒れても、全的に生きていたかと。これが問題です。そういうことだろうと思われます。

ところが、本当に聖霊が内住して来るというと、どんなに破れ器であっても、まことに生きざるを得ない。でなければ、聖霊はどこかへ行ってしまう。御霊というのは――これは説明がつかない――力だから、そのようにして生きざるを得なくなってくる。「聖霊プラス実存」ではない。聖霊は実存を伴わざるを得ざるところの霊なんです。

この花はいろいろな形や色をしている。これは現象です。現象だけれども、この現象は即、本体を現している。聖霊という本体は、即それぞれの現象を現す。現象と本体とが一如の相になる。これが聖霊の世界です。ただし、我々はこの聖霊に完全に即して歩けない。そこに、乱れもあるし、矛盾もある。けれども、必ず御霊がその破れを通して現れてくださる。何分の一であろうと構わない。

「見たところ立派な行為よりも、誠に情け無い姿であるが、しかし、そこには本当の行為がある」

というのが本当の行為です。ですから、この御霊の世界は一如ならざるを得ないところの質を持っている。

学生ならば勉強せざるを得ない。楽しいんです。御霊によって動かされていることは全部楽しい。どんなに辛いことでも、その中に楽しさがある。楽しみを求めてはダメです。楽しみが伴って来る。嬉しさが伴って来る。シラーが

「人間は遊んでいる時が本当の姿だ」

と言いましたが、この「遊び」という言葉は誤解しないでいただきたい。自然に現れている姿が遊びなんです。無理がない。そういうような事態が御霊の事態です。

要するに、御霊の世界では、為すことやることが偽りでないということです。藤井先生が「真実」ということを言った。そうすると、「真実、真実」と言って、「まことさがない」だのと言う。真実というものが、一つのお題目みたいになってしまう。そうすると、これはパリサイになる。真実なんていうよりか、私は「砕け」「あるがまま」と言う。「真実」（アレーテイア）というのは、

「人間の真実なんか、当てになるか。キリストだけがまことだ」

とパウロが言っている。

「目を覚ましおれ」というのは、「毎日本当に生きていろ」ということです。「神の最後の日はいつ来るだろうか」なんて計算する教派があるね、冗談じゃない。

「汝らはその日その時を知らざるなり」

と、知らなくていい。知る必要なしなんです。

「どうぞ、いつでもいらっしゃってください」

と。生きることが待つことです。私なんか随分無駄な生き方をしたよ。過去を省みれば後悔だらけだ。だから、もう少し生きざるを得ない。償わなくてはならないから。

そのような「燈火」（聖霊）とその「油」（実存）。油が無くて、燈火は一体るんですか。それは無尽の油です。尽きざる油。旧約のエリシアのところに出ている。あの預言者エリシアというのは素晴らしい。これは本当にエホバの霊の働いている世界です。

少し先へ行きましょう。「タラント」の話。お金を預けて出掛けて行ったがそれを銀行に入れたのどうのこうのと、キリストのというのは、なかなか面白いものだ。いろんなことが書いてある。これを何も活用しなかった者はダメだと言われた。その頃もう、銀行が在ったんだね。

27さらば我がを銀行にあずけ置くべかりしなり、我きたりて利子とともに我が物をうけ取りしものを。28然れば彼のタラントをてる人に与えよ。29すべててる人は、与えられていよいよ豊かならん。されど有たぬ者は、その有てる物をも取らるべし。

経済学の本みたいだ。こういう言葉があると、誤解する。また、悪用する。

# ●キリストの実存

私が今日お話したいのは、今のその最初のところと、それから特に終わりの方です。25章31節から。

31人の子その栄光をもて、もろもろの御使をいたる時、その栄光の位に坐せん。32かくて、その前にもろもろの国人あつめられん、これを別つことが羊と山羊とを別つ如くして、33羊をその右に、山羊をその左におかん。34ここに王その右におる者どもに言わん「わが父に祝せられたる者よ、りて世のより汝らのために備えられたる国をげ。35汝ら我が飢えしときにわせ、渇きしときに飲ませ、旅人なりし時に宿らせ、36裸なりしときにせ、病みしときにい、獄に在りしときに来ればなり」37ここに正しき者ら答えて言わん「主よ、なんじの飢えしを見て食わせ、渇きしを見て飲ませし。38なんじの旅人なりしを見て宿らせ、裸なりしを見て衣せし。39何時なんじの病み、またに在りしを見て、汝にいたりし」40王こたえて言わん「まことに汝らに告ぐ、わが兄弟なるこれらのいと小さき者の一人になしたるは、即ち我に為したるなり」

キリストは「兄弟」とおっしゃったって、勿論、兄弟姉妹の意味なんです。

要するに、これはの心、助けの心です。これはもぅ、キリストの実存の一端がそこに現されている。食らわせ、飲ませ、宿らせ、着せ、とぶらい、獄を訪ねるという。

『天国入門の資格』と今日の標題に書いた。

「愛を生きなかった者は天国に入れない」

と仰る。プロテスタントは「信仰によって義とされる」なんて言って、これをお題目にしている。

「アブラハムは信仰によって義とされた」

とパウロが言った。ヤコブは

「アブラハムは行為によって義とされた」

と言った。実は同じことなんです。ところが、マルチン・ルターはヤコブ書のその気持ちを取り損なって、「ヤコブ書はけしからん、これはの書簡だ」なんて言った。それは、ルターのあの時の使命としては、「信仰」を一点張りに言わざるを得なかった。パウロもユダヤ教に対して、信仰を言わざるを得なかった。しかしながら、信仰をもの凄く強調したところのパウロもルターも、ものすごく行為的な人でした。彼らの信仰が、いかに行為と別つことのできない信即行であったか、事実が証明している。だから、信仰という言葉は、私がしょっちゅう申し上げている通り、「信行」または「信交」と書きたい。これは実は、福音の世界だ。

キリストが

「を行う者のみ天国に入る」

と仰った。「さぁ困ったな、そんなに行えないな」と、こうくるわけだ。心配は要らん。二段構えの考え方をしてるうちは、いつまでたってもダメです。信ずるということが、一番激しい内的な行為なんです。その行為も自分でんでする行為ではない。圧倒されて信ぜざるを得ない、キリストのところに行かざるを得ない。他にどこに行けますか？　このように驚くべき愛をもって、救い上げてくれた方、贖ってくださった方、永遠の生命を与えてくださる方。その一番中核であるところの聖霊を降してくださる方。これにもぅ、圧倒されてしまう。

# ●聖霊のバプテスマ

聖霊の臨み方は一人びとり、人によってそれぞれです。ただ、私みたいな者はもの凄い天界からの霊に撃たれた。坐っていたら、グーッと身体が持ち上がって、全身がしびれた。「これが聖霊のバプテスマか！」と。しかし、そのの集会での体験の後で、マタイ伝の

「なるかな、霊の貧しき者、天国はその人のなり」（マタイ５・３）

という言が、

「恵福なるかな、我が十字架によって霊が貧しくされた汝、天国即ち聖霊の我、汝の中に在り」

と響いた。これが決定的な体験なんです。

阿蘇では、とにかく驚いてしまったけれども、しかし、阿蘇の帰りに聖書を読むとベールがとれて、一体今まで何を読んでいたかということが分かった。

マタイ伝５章３節はガラテヤ書２章20節と同じです。

「われキリストと共に十字架せられたり、我もはや生くるにあらず、キリストわがに在りて生き給うなり」（ガラテヤ２・20）

これは、プロテスタントはお題目にしている。観念で受けとっているだけだ。

「キリストわが中に」

とは何ですか。

「御霊のキリストが、キリストの御霊がわが中に来たりて生き給うなり」

と。これは否定することができない。私の側がどうであろうと、そんなことは問題でない。「わが証人となれ」とキリストがいわれた。

「聖霊が臨んだら、お前達は地の果てまで、世の末に至るまでわが証人となれ」

と書いてある。使徒行伝で復活のキリストが言われた。聖霊が臨むと、御霊は愛の霊ですから、今、キリストが言われたこの譬話のような、こういうことが自然にできてくるわけです。

人間はエゴイストだから、そのエゴイズムには戦わなくてはいかん。戦わなくてはいかんが、しかし、その戦いは努力の戦いでない。御霊の中に「主さま！」と言って入れば、これに勝てる。

けれども、人間というのは生まれつき、非常に愛の有る人もあるし、なかなか愛の乏しい人もあるし、智恵の有る人もあるし、智恵の足りない人も有る。いろいろだよ、人間というのは。けれども、その人のその人らしさをもって受けとって行くところに、「まこと」ということがあるわけです。

# ●贖われた無の根源現実

しかし、「キリストはこういうように仰ったが、私は省みてみると、果たしてそれだけ人を憐れんだか、渇いた時に水をやったか」なんて、計算するとマイナスになったりして、「これでは、天国に入れないな」なんて思う。ところが、キリストと一緒に最初に入ったのは誰ですか。片一方の盗賊だ。とてもこんなのに及第できない。しかし、

「さんざん悪いことをしたから、私は十字架に架けられた。仕方がない。せめても覚えてください」

と、魂が砕けました。しかし、もう片一方は、

「お前は神の子なら俺達を助けたらいいだろう」

なんて高慢に言った。こっちは地獄に落とされる。片一方は天国へキリストと一緒に、

「汝、今日、我と共にパラダイス」

と言われた。

この片一方の盗賊はこの資格の中に入らない。それではどうするんですか、この譬話は。この譬話はこれでいいさ。

いかにそのような愛に生きることが大切か、これはキリストが言われた。しかし、キリストの福音の世界はいかなる限定もない。無資格でいい。譬話を破るようなことを、私は言いますけれども。どう考えても、無資格だ。

「我はのなり」

とパウロは言いました。こちら側の実存を計算する必要はない。さっきから「実存、実存」と言っているけれども。

福音の世界はあらゆる条件を超えた世界です。パウロはその世界に入って、いろんな戒めを言っています。キリストもいろんなことをおっしゃいます。けれども、福音の一番のどん底は無条件の世界です。これは贖われたる無の根源現実なんです。私はどうであろうといい。どんなに非難されようといい。私の根底には十字架が開いた凄い世界がある。賜りたる無です。悟った無ではない。禅宗の無ではない。この賜りたる無のところに聖霊は来ざるを得ない。聖霊がやって来るということが一番根源の現象なんです。

太陽の光がこれを貫くから、花がこのように美事に咲く。百花繚乱というわけです。皆さんは一人びとりが天下一品に造られている。御霊が入って来ると、それが本当に花咲き実が稔る。皆、ずから神の栄光、自ずからキリストの証しということになるので、こちら側を省みる必要はない。資格にして資格にあらず、ということです。「これだけのことをしましたから、入れてください」なんて言う必要はひとつもない。「できませんでしたから…」と言ってることもない。それが無であって、砕けの世界なんです。キリストの十字架で砕かれたる魂です。自分で砕けたのではない。

「砕けたる魂を喜ぶ」

と詩篇の51篇にあるけれども、人間の自分の砕けなんてものは当てにならない。キリストが砕いてくださった、キリストが与えてくださった無である。そこで「ざるを得ない」で動いて行く。ざるを得ないで動いて行くんだが、いろいろ人間の性格で、そのざるを得ないがどれだけ現象するかは、その人によっていろいろだ。いいよ、そんなことは。詩篇139篇の、

「汝知り給う」

です。キリストは我々一人びとりを、いかなる人間も知らない知り方をしていらっしゃる。キリストの知は、の知です。批判の知ではない。旧約聖書のこの「知る」という言葉は素晴らしい深い言葉です。ことにホセア書がそうです。エレミヤがそうです。ホセア、エレミヤは愛の預言者だが、これが「知る」という言葉を使っている。本当に憐憫をもって、愛をもって全存在で相手を知ることを「知る」という。キリストの知り方はそういう知り方です。

# ●平安が来る

それで、本当に平安が来る。ダンテの『神曲』の天国篇の第三曲（81行）に、

「神さまの御旨の中に自分を置くことが、この恵まれた者の本性である。天国の段階から段階へとこの天国に我等の居るは、神さま（キリスト）の意志の中に我等を意志せしめる神さま並びに全天国のこころに叶うのである。また、彼の意志は我等の平安である」

とある。

「キリストの意志の有るに我々の平安がある」

とは有名な一句です。

「汝の意志の有る処に我らの平安あり」

という言葉です。この「平安」という「シャーローム」という言葉はユダヤ人の挨拶の言葉で、「こんにちは」でも「さよなら」でも何でも、シャーロームという。

「平安が貴方にありますように」（シャーローム　ラケム）

という。

「汝の意志の有るところ」というのは、これは神さまの憐憫の心だから、そこに平安がある。だから、山上の垂訓の、

「なるかなある者、その人は憐憫まれん」（マタイ５・７）

という、あの言葉は一番深い。第一言はすべてにかかって来ますけれども。平安がまた力です。平安は喜びであり、力である。

平安という言葉は、ギデオンの士師記第６章のところに出てくる。

「よエホバ汝とともにす」（士師記６・12）

エホバがお前ギデオンと一緒にいらっしゃるから、怖がるなと。

「エホバこれにいいたまいけるは、心安かれるるれ、汝死ぬることあらじ。ここにおいてギデオンかしこにエホバのために祭壇を築き、これをエホバシャロムと名付けたり」（士師記６・23～24）

「心安かれ」とは「平安あれ」ということです。これが最初に出てくる言葉です。

「エホバはわがシャーローム（平安）である」

と。或は「シャーロームの神」という意味です。平安の神、平安を与え給う神とい

うわけです。

# ●自然・霊然・神然

人を助けたり、助けの内容はいろいろありますが、みな具体的なことです。聖霊は愛の力だから、そのように働いて行くわけです。力ある愛だから。愛はただ感情ではない。パウロは

「福音は言葉にあらずして力なり」

という。「愛の力」「力の愛」と言ってもいい。「行為、行為」とキリストは言われるが、

「私を受けとれば、そういうような力が現れるぞ。それが言葉と成ったり行為と成ったりするぞ」

ということです。何か、律法的に道徳的な命令のように思ったらダメです。全部、霊的です。それを「霊然」と言いたい。

自然霊然という。「自然・霊然・神然」という言葉を著作集第九巻『感想と紀行』にも書いた。大自然は自然である。これはみな法則の世界です。全部、「ダルマ」の世界。「法」という字は「水は低きに流れ去る」ということから来ている。物理法則だ。そういうのが自然なんだ。法は実は「自然」という字なんだ。水は低きに流れ去る。上へ昇って行く水があるか？　要するに、流れるということはみな低きに流れる。これが自然の姿。しかし、それは物理法則の世界です。断崖の松でも、あの姿が自然なんだ。人工的な美よりも、何と言ったって、自然の美にはかなわない。この自然の美しさを

「ソロモンの栄華もこの花の一つに及ばない」

とキリストが言われた。

道徳法則というものもある。カントは、道徳の法則と天然の自然の法則が素晴らしいものだから、

「これを思えば思うほど、自分は驚嘆と畏敬の念をもってこれを思わざるを得ない。それは頭上の星辰の空とわが中なる道徳の法である」

という有名な言葉がある。『実践理性批判』の一番終わりに出てくる。道徳のことを言いたかったら、カントの『実践理性批判』は一応読まなければならない。「観念、観念」と言うけれど、カントは単なる観念ではない。

「誰も行えなくとも道徳法則は厳然としてある」

という。

御霊に入ると、私たちは第二の自然になる。それは「霊然」という世界です。本当のクリスチャンはどこでも世界中、みな霊然でなければならない。

キリストになると、これは「神然」なんだ。キリストは神と一つになっているから。神然たるはキリストのみ。キリストは我々のことを

「神々と言って何故わるいか」

と仰った。そういうことも詩篇の中に出ている。

# ●絶対恩寵の故に

ヨハネ伝の中にも出てる。キリストは、

「我と父とは一つなり」

と仰った。我々は、

「我とキリストとは一つなり」

です。「絶対恩寵の故に」というんですよ。「だいぶ実存が良くなったから、だいぶ一つになって来ました」なんて、そんなことを言っているのではない。

「絶対恩寵の故にキリストとは一つでございます」

ということ。この「一つ」が言えなかったら、力は来ない。

「普通の民族宗教は上なるものに対する畏敬の念。哲学的な宗教は同等なる人に対する畏敬の念。おのれより低きものに至るの世界、これがキリスト教だ」

と、ゲーテが『ヴィルヘルム・マイスター』の終わりの方で言っている。

「けれども、もう一つある。それはわが中なる霊に対する畏敬の念」

とゲーテは言った。これは全部渾然としている。ゲーテはそういう人なんです。「わが中なる霊」ということは、

「人は神の似姿に造られた」

という言葉。これはゲーテの好きな句です。「神の似姿」（エーベンビルト・ゴッテス Ebenbild Gottes）という。ゲーテは、

「人は神と同じ相に造られているとあるではないか。人は本来は神と同質なんだ。その霊に対する畏敬の念を持て」

ということです。私たちにとっては、この霊が損なっているから、聖霊が来る。

「わが中なる聖霊に対する畏敬の念」

ということです。そんなことはドイツ文学者の誰も知らない。言わない、言えない。この聖霊の世界を持たないから。

「エン・クリスト」（ΕＮ　ＸＰＩΣＴΩ　キリストの中に）

というのがこれなんです。「エン・エモイ」（我が中に）なるキリストということ。パウロがさんざん言っている世界がそこではないですか。パウロがなぜ凄いかというと、この世界を持っていたから、この世界に入れられていたからです。コリント前書11章にあるような百難を突破した。これは本当にたまらんです。

# ●無資格無条件

だから、これを持っていることは、我々の側の如何なる資格でも何でもない。誰でもが無条件にこの御霊を頂く。無資格である。「お前はだいぶ善くなったから、御霊をやろう」なんて、そうではない。

「お前はでたらめだね。いいよ、聖霊をやるから。ただ、その前に私の十字架を受けろ」

ということです。

「十字架・聖霊」というのは、私はこういう印（〇の中に十）を書く。聖霊は円です。相対的な判断は、私にはひとつも力にならない。ある絶対的なところに来ないというと、どうにもならない人間なんだ。だから、絶対恩寵です。十字架も聖霊もみんな絶対恩寵の世界です。こちら側の何ものでもない世界。無条件に頂ける世界。無資格で頂ける世界です。「天国入門の資格」なんてのは本当は要らない。逆説的な言葉ですから。資格はひとつも要らん。

「ただ、私はあなたを受けとらせていただきました。躓いたり転んだり倒れたり滑ったりしました。しかし、あなたのところの他に行くところはありません」

というわけです。けれども、神さまは皆さんにその破れ器を通して、自分でも驚くようなことをしてくださる。

生まれつきの私は臆病者の弱虫の「ずくなし」だったが、それが変えられてしまったんだから仕方がない。変えられたということを告白するよりか仕方がない。ということだけです。

そして、いろんなことが見えて来る。何を見ても聞いても、それがみんな、キリストの福音の光でもって変質される。そして、如何なるものも排斥しない。サタンだけは困るけれども。全部、救い上げていく。仏教であろうと、何教であろうと、およそ偽りのないものは全部受けてしまう。パウロもそういったことを言っている。だから、福音の世界は広大無辺な世界なんです。一切を担い上げて、一切を包み上げてしまう。

私はそういう天国を書くつもりです。東西古今にわたって、宇宙的な空間において。たまらんです。

「もし、このいと小さき者をいいかげんに扱ったら、どっこいということだぞ。知らんぞ」

と、キリストはそういう厳しさをもって言ってらっしゃる。

# ●神のみぞ知り給う

それでは、どういう答案を書きましょうか。答案は書けない。歴史そのものは、宇宙そのものは全部、神秘なドラマです。我々人生そのものがドラマです。神のみぞ知り給う。平伏して進むよりか他にない。「こうやれば天国に入れそうだ。こうやれば落っこちそうだ」なんて、そんなことはひとつも要らん。そういう判断はひとつも要らん。キリストはただ、

「どんなに善きことをし、偉そうであっても、どっこい、小さな一人をったらダメだぞ」

という。これは羊と山羊の譬話のキリストの御意が、いかに小さき者、弱き者、悲しめる者をキリストが憐れみ給うことであるか、ということです。

だから、黙示録にも出てるでしょ、権力者がみんなひっくり返ってやっつけられる。この世で栄えた奴、暴力を使った奴、悪巧みをした奴、そんなのは皆ひっくり返ってしまう。

日本人の魂の教育は大変だ。福音を頂いた者はそのことを証して行かなくてはいかん。聖霊は驚くべき智恵を持っている。聖霊は驚くべき力を持っている。聖霊は驚くべき愛を持っている。あらゆるものをもって聖霊はその人を通して働き給う。は様々です。

「御霊なき者はキリスト者にあらず」（ロマ８・９）

とパウロが言った通り。資格ではないけれども、天国に入るのに聖霊だけは携えないとこれは困る。「お前は聖霊があるか？」とはキリストは仰らない。全実存を見て判断なさると思います。「キリスト」の「キ」の字も知らない人が天国に入る。聖書をよく知っている人が、「どっこい、ダメだ」といって入れない。誰か知らんや、神の裁き誰か知らんや。仏教徒であろうと、回教徒であろうと、何教徒だっていい、それが「本当の人間か」ということだ。宗教を鼻に掛けたような奴はダメだ。もぅ、言葉では説明できない。

天国の資格は、有れども無きがごとし、無けれども有るが如しということ。「『入門の資格』なんて先生はつまらない題を書いた」と。本当につまらないよ、こんな題は。入門の資格は、落第生が入って行く。いわゆる及第生は入れない、なんてなわけだ。

このような読み方を、私たちには、御霊の力と愛と光と智恵でできるわけです。私はだんだん簡単になるので困る。

# ●たんぽぽ

マタイ伝の13章。ルカ伝は「神の国」だけれども、マタイ伝は「神の国」と言わないで「天国」という。

「視よ、種まく者まかんとて出づ。まくとき路の傍らに落ちし種あり、鳥りてついばむ。土うすき石地に落ちし種あり、土深からぬによりてやかに萌え出でたれど、日の昇りし時やけて根なき故に枯る。の地に落ちし種あり、茨そだちてこれをぐ。良き地に落ちし種あり、或いは百倍、或いは六十倍、或いは三十倍の実を結べり。耳ある者は聴くべし」（マタイ13・３～９）

人間は、生まれつきの環境、運命があります。「どうして私はこんな家に生まれたか。こんな環境に生まれたか。こんな頑固な親の子供になったか」なんて、いろいろあるわけだ。そして、運命環境に責任をきせるわけです。それは運命環境にも責任はありますよ。「神さまは不公平だ。神さまはあるのになぜこんなに不幸なんだ」なんてなわけだ。

キリストも、こうやっていろいろ後で説明してらっしゃいますが、それはそれで勿論承りますけれども、聖霊がくると、それが、茨があろうが、路の傍らであろうが、どこだっていい。

私は『たんぽぽ』という詩を書いたでしょ。あれは、ちょっと不思議な詩ですから。

『たんぽぽ』

コンクリートの道の

われめの中に根をおろし

ギザギザっをうち拡げ、

黄色にかがやくタンポポよ！

なのタンポポよ！

焼きつくも何のその、

誰が水をるでもなしに。

おまえに負けるよ人間どもは、

運命環境に愚痴を言う。

タンポポよ、おまえはやがて

真白な羽を身にまとい、

を軽々と風に乗せ、

飛んだり着いたり、また飛んで、

自由に天地を渡り往く。

　　　　　　　（著作集第九巻『感想と紀行』162頁）

私は時々タンポポを見る。本当にコンクリートの割れ目から咲いている。これは「路の傍らに落ちた種」だ。このタンポポはキリストの譬話を破るようなことをやっている。泥沼の中の白蓮の花もそうだ。運命環境の故にどうのこうのと言うのは、これは生まれつきの我々のこと。聖霊が来ると、それに打ち勝つ。それが艱難なところであればあるほど、逆に聖霊は働き給う。だから、キリストのこの譬話を破ります。「そうだ」とキリストは仰ってくださる。

芸術の世界であろうと、事業の世界であろうと、政治の世界であろうと、昔から本当に苦難と戦った人がある。エイブラハム・リンカーンなんかそうだ。リンカーンの伝記なんか読むと涙が流れる。中学の二年の時に読んで、私は涙を流したことを覚えている。丸木小屋の一室一棟だ。そこでリンカーンは育った。

大体今はあまり物がそろい過ぎてしまって、小さい人達が鍛えられない。私は正直歯がゆくなる。小学校の先生が甘すぎる。ただ「叱れ」というのではない。厳しさと本当の優しさと両面が自在に展開していくような教育の仕方。それは教育者自身が福音を持たなければできない。宗教心を、本当の意味で持たなければダメなんだ。学校で特定な宗教を教えることができないとしても、先生が宗教心を持たなかったらダメなんだ。

文学の世界ではおが「アルファでオメガ」（始めで終り）です。ケーベルさんがそう言っている。だから、アンデルセンのメルヒェンだの、イソップのお伽噺が大事なんだ。ああいう世界の最高の第一流の文学を読まないで、マンガばっかり読んでしょうがない。日本のお母さん達が――何もお子さんがなくてもいい――女性が第二の国民を本当に育ててくださらなければ。魂の教育は女性がやるんです。男は働いているからダメなんだ。偉大な人たちのお母さんは、みんな魂が素晴らしかった。ほとんど例外ない。伝記を読むと分かる。ゲーテのお母さんも素晴らしい太陽みたいな人だった。天国に行くと女性上位というわけだ。男は威張ってばかりいるから、「どっこい」というわけだ。

だから、運命環境に関わらず、御霊の力で、有り難くてしょうがない。かこつことがなくなる。「よし来た」と、絶対に行き詰まらない。

あなた方は、いきなりこの十字架・聖霊の世界に入ってしまったんだから、これは大変なもんだ。

この『たんぽぽ』の詩みたいに運命環境に負けないで行ってください。羽でもってスーッと飛んで行く。

# ●一対一の伝道

「天国は一粒ののごとし、人これを取りてその畑にくときは、よろずの種よりも小さけれど、育ちては、他の野菜よりも大きく、となりて空の鳥きたり、その枝に宿るほどなり』」（マタイ13・31～32）

種が根を下ろすと、芽が出て来て、枝が生えて、葉っ葉が付いて、花が咲いて、実が稔るというわけだ。

「天国は種一粒の如し」

と。これも「一」だ。二粒なんて書いてない。「一粒の種」というと、あのブレイクの詩を思い出す。

「一粒の種の中に宇宙が宿る」

という。聖霊が来ると、宇宙的な人間になる。あなた方お一人お一人はそういう「一粒の芥子種」です。

キリストのこの譬話に真似て言うならば、

「一対一の伝道をしなかった者は、どっこい天国に入るわけにはいかない」

ということです。私がこの13章で今言おうとするのはそのことなんです。福音を受けたら、この芥子種のごとくに展開していく。また、一粒の稲のように、これが何百倍に増えていく。だから、この福音を受けとったならば、どうしても、生涯を通して人に伝えていく。一年に一人で結構です。生涯を通して一人でもいい。とにかく、人に伝えないでそのままだったら、

「これはちょっと天国は待て」

ということだろうね。それくらいのことは思ってください。律法ではないけれども。「一生懸命やりましたが、とうとう一人も救えませんでした」と、いいよそれでも。本当に一生懸命にやったのなら。結果を言っているのではない。心を言っている。

# ●この聖霊だけ

「天国はパンだねのごとし」（マタイ13・33）

これは、ひとつの解釈の仕方があって、

「下手すると悪い増え方になるぞ」

ということの譬になる。「麦と毒麦の話」もある。

「麦と毒麦は大いに生やしておけ。最後には、インチキなものは皆焼かれてしまうぞ。今からそんなにあわてて判断しなくてもいい」

と。まぁ、ドラマだね、本当に。

「天国は畑に隠れたる宝のごとし。人、見出さばこれを隠しおきて、喜びゆき、有てる物をことごとく売りてその畑を買うなり」（マタイ13・44）

キリストもなかなか悪智恵みたいなことを仰るけれども、「隠しおき」だってさ。

「また天国は良き真珠を求むる商人のごとし。値たかき真珠、一つを見出さば、往きて有てる物をことごとく売りて、これを買うなり」（マタイ13・45）

この「有てる物をことごとく」が大事なんです。隠そうが隠すまいがそんなことはどうでもいい。ということは、「他の物は一切顧みずに」ということ。売ったって売らなくたっていい。そんなものは有れども無きがごとしと。そんなものは顧みずに、

「この聖霊だけだ、福音だけだ。キリストだけだ。それが本当の天国だ」

ということです。相対的なものにこだわらなくなる。与えれば与えるほど、宝は天に積む。

私みたいに八十才を超えると、なおさらそういう気持が楽になってくる。勝手にしやがれと。

イザヤ書の61章に、

「１主エホバの霊われに臨めり。こはエホバわれにをそそぎて貧しきものに福音をのべ伝うることをゆだね、我をつかわして心のめる者をいやし、にゆるしをつげ、められたるものにをつげ、２エホバのめぐみの年とわれらの神の刑罰の日とを告げしめ、又すべてむものをなぐさめ、３灰にかえ冠をたまいてシオンの中のかなしむ者にあたえ、にかえてのあぶらをあたえ、うれいの心にかえて讃美の衣をあたえしめたもうなり。かれらは義のエホバの植えたもう者その栄光をあらわす者ととなえられん。」（イザヤ61・１～３）

素晴らしい言葉だね、この61章の始めのところは。これが福音の世界で、このようなことになるぞと。御霊の働きはこのようだぞ、ということです。とにかくイザヤ書というのは凄い。

# ●大肯定

この「隠れたる宝」であろうと「真珠」であろうと、みんなこれはキリストであり、聖霊である。

「他のものはみんな要らん。捨ててかかれ」

「我よりも何々を愛する者は我にふさわしからず」

と。あんなことを言うもんだから、昔は日本では「普通の道徳に反する。国民道徳に反する」なんてやってるんだ。そうではない。

「そんな相対的なものをとやかくと考えていてはダメだ。絶対者に直面しろ。そうしたならば、その力が、その愛が、今度は、捨てたと思った者たちを全部救い上げてしまうぞ」

ということです。いいですか。いろんな悲しいことに遇ったり、いろんなことがあっても、逆にこれが聖霊の恩寵が働くところだと思って、大肯定をして進んでください。

だから、みんな驚いた。

「……人々おどろきて言う「この人はこの智恵とこれらの力とを何処より得しぞ」

と。これは私たちがそうなんです。「この人はこの智恵と力を何処より得しぞ」と。

「キリストから来ました。その中核は聖霊でございます」

ということです。

「これの子にあらずや、その母はマリヤ、……」

これは躓いている。それで、キリストは出てしまった。ちゃんとその通り書いてある。「変な野郎だなぁ」なんて皆に言われて。

「預言者はおのがおのが家の外にて尊ばれざる事なし」（マタイ13・54…57）

と。家の中では尊ばれないと言う。いわゆる一番肉的に親しい者はなかなか受けとらないというわけだ。

信仰の世界は血族にあらず。一人びとりが神・キリストに直結する世界です。もちろん、親から受けとって、入りやすい人もいます。それはいろいろです。

要するに、人生も歴史もみんなドラマです。自然界そのものがドラマの場なんです。その混沌たる、或いは説明のつかないところのドラマの中で乗り切っているのがこの聖霊の力、御霊の愛の力だけです。

もぅはっきりしました。大丈夫です。なにしろ、五つのパンと二つのお魚で五千人も満腹させて、余すような驚くべき人だから。大変なもんだ、キリストに働いているこの聖霊というものは。無限無量の質を持っている。そういうことを普通は言わないらしいね。いわゆる注解書よりかダンテの『神曲』でも読んだ方がよっぽどいいよ。

要するに、そういう意味で、

「我々救われた者は大いに他の人を救いなさい」

ということ。この集会をやっているのは、本当に、悩める者・苦しめる者・求める者・悲しめる者にこの福音を語って、いわゆる正常な人よりかもっと凄い世界に入れてやろうという、そのためであります。

# ●御霊の力

これがマタイ伝の13章なんです。マタイ伝はの福音でありますが、その言が

「わが言は霊なりなり」

であって、単なる言葉ではない。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネは渾然としていますから、いわゆる線なんか引けませんけれども。「言は力なり」なんだ。パウロは、「言にあらず力なり」と言ったけれども、キリストにおいては

「言は力なり」

と言うことができる。死人を甦らせるようなひとだから。「起きよ！」と言えば、死人が起きてしまうんだ。

しかも、ペテロもパウロもヨハネも実際にやっている。特にペテロとパウロのことが使徒行伝に出ている。あれは皆、言葉が、力の世界が現れている。それが、くような言葉であろうと、何であろうと全部、力が入っている。

病気のひとに祈る時は、先ずその人の一番中心にキリストの生命が、御霊の生命が来ることを祈る。病の現象の面ではない。奥の世界です。そうして、そこを本当にグーッと祈り込んで、そこから

「主さま！　どうぞこれをしてください」

と祈る。ただ癒しを求めるのではない。その人の中に御霊の力が入って生命が流れ出したら、内側から治って行く。根源の現実なんです。そこから治って行く。そうして、治された状態を念じながら、即現在として祈っていくことです。それが、その瞬間において、聞かれようが聞かれなかろうがいい。それは必ず結果して行きます。その人によって受け方がいろいろだから。こちら側はその線をもって進んで行く。

福音を受けとらない頑固な者がいる。そういうのは人生のどこかで、電信柱にぶつかって額から火の星みたいのが出て、それからやっと、「これはいかん」と気がつくわけだ。人間は失敗したり、躓いたり転んだりしないと、展開しないように情け無くできている。スーッとなんか行かない。

私たちは、このマタイ伝を、ごく一部分をこうやって食らいましたけれども、これがいかにいわゆる言葉でないかということに気がついたわけです。

「言は力なり」

ということに気がついたわけです。キリストの権威ある言、

「なるかな、霊の貧しき者、天国はその人のなり」

と。「天国は汝の有なり」という、力を持った言です。その言の現実の中に自分を入れるわけです。入れると貧しくされてしまう。天国がやって来てしまう。「はぁ、そうですか」ではない。「どうすれば、そうなるか」ではない。言の現実の中に自分を投げ入れると、言の力が働く。そんな読み方は普通はしない。私は、ものを言うのは、その中からものを言っているので、外から説明しているのではない。

とにかく、大変なもんだ、キリストは。聖書がなぜ万巻の書と違うかというのは、そういう神の力を持った言の書だからです。思想ではない。救いの現実なんだ。救いの光、救いの愛なんだ。闇を光に変える世界です。

レンブラントの絵は随分暗い所があるが、どこか一角から光が射してる。あの光が闇に勝つ。レンブラントやダ・ヴィンチに負けないような画家が出て来ないかね。

聖書は本当に、まぁ何という書かと思う。聖書自身が大ドラマだ。闇を光に変えんとし、罪びとを神の国の人に変えんとしている。黙示録では大讃歌のうちに、最後の新天新地を望んで進んで行くところの、我々は旅人であります。地上の旅は序曲に過ぎない。

「…百歳にて死ぬるものもわかしとせられ、百歳にて死ぬるものをれたる罪人とすべし」（イザヤ65・20）

だってさ。まず凄いことが書いてあるね。

どうぞ、あなた方も、何も百歳を突破しろと言っているわけではないけれども、何歳であろうと、もう百歳を突破したような生き方をしてください。「年齢は問題にあらず、私は永遠歳です」なんてね。死んでも死にませんから。これはキリストが言っている。

そういうわけで、我々は、マタイ伝のごく一部分にかじりつきましたけれども、そこから、

「キリストの言は生命であった、力であった、光であった、愛であった」

ということを、どこを読んでもこれにぶつかって受けとり、アーメン・ハレルヤであります。